

批評眼の大切さ —悪意なき欺瞞—

石川純治 (駒澤大学経済学部教授)

- 1 はじめに—批評眼の大切さ—
- 2 評論と在野精神—在野の誇り—
- 3 新会社法への批評眼—理念に照らした根源的な問い—
- 4 法人税制への批評眼—新会社法と法人税制—
- 5 何のための学問か—「悪意なき欺瞞」という眼識—
- 6 人の力、教育の力、学問の力
- 7 風潮に流されない—自立した人間に—
- 8 むすびにかえて—「一圓相」と「我逢人」—

1 はじめに—批評眼の大切さ—

評論・批評・批評眼 評論 (critique) とは広辞苑には「物事の価値・善悪・優劣などを批評し論ずること」とある。批評は「物事の善悪・美醜・是非などについて評価し論ずること」、さらに批評眼は「批評する眼、物事を批評しうるだけの眼識」とある。何事においても、この眼識が大切である。平たく言えば「目利き」ということだ。だが、今日、この批評眼という意識が乏しい。世に巻かれるまま、世論や風潮に流されるままでは、こうした意識は出てこない。

本稿では、昨今の新会社法および法人税制に対する批評眼ということを通して、批評眼の大切さを強調してみたい¹。

2 評論と在野精神—在野の誇り—

事実と価値 社会科学において事実と価値とは分離・分断できるか、という根本問題がある。先の「物事の価値・善悪・優劣などを批評し論ずる」という評論は、分離・分断できないという見地にたつ。だが、他方で学術 (アカデミズム) という名のもと、“自己目的 (自己満足的)” 研究に安住する姿勢、“ジャーナル共同体的” なアカデミズム体質が存在する。

在野の誇り ところで、評論の世界では「在野」は必ずしも悪くはない。それどころか、在野だからこそ物申す「在野の誇り」がある。「世間論」で知られた阿部謹也は、「世間」としての学界を見せてくれたが、そうした「世間」という目から見ると (身内仲間の世間体)、「在野の誇り」どころか「権力」や「権威」に対峙する姿勢などとても望めない。

権威の正体を ここで、拙著『変わる社会、変わる会計』(日本評論社、2006年)の次の一節を引用させていただく。すなわち、「アカデミズムの良質性の基準をどこに求め

¹ 本稿は2007年1月20日の「駒澤会計人会」新年研修会での話しをベースにしている。

るかという点でいえば、その重要な基準の一つは（国家に限らず）広い意味での「権力」や「権威」あるいは「世論」に対する態度にあるように思える。たとえば、マスコミなどを通して作り出される権威の正体（虚像の正体）を正しく見せることは、アカデミズムのひとつの社会的な役割と言えるだろう。だが、今日、逆に冷静さを失って、権力や世論におもねるアカデミズムの見識のなさ、節操のなさがけっこう見受けられる。ここに、本来的な『学問の力とは何か』を問う意味がある」（185 ページ）²。

自著の基底には ちなみに「日経金融新聞」の依頼で、「自著行間を語る」を書いた。そこでは、拙著で強調したい点を特に3点あげておいた。すなわち、「1つ目は、単なる時事解説にとどまらず理論的視点も随所に織り交ぜている点です。時事を通して理論学習へ、というのが本書の1つのねらいだからです。2つ目は、批評精神の大切さです。権威や世論、風潮といったものに対する態度です。本物と偽物を見分ける目利き、眼識をもつということです。3つ目は、規範と現実、自由と規律、このはざまにどう主体性を保ちうるかにかかわります。経済産業政策の具になってきている法や会計に対し、アカデミズムの力量と責任が試されています」と。

（ここに『日経金融新聞』06年10月24日付「著者 行間を語る」が入る）

3 新会社法への批評眼－理念に照らした根源的な問い－

規範と現実 周知のように、商法とりわけ会社法においては、平成13年、14年の商法改正、さらに平成17年の新会社法の成立によって、その規範（理念、原理・原則）にかかわる抜本改正が行われた。特に規範と現実との乖離が大きくなったとき、規範が現実の方に合わされようとする1つの事例（現実>規範）をそこにみることができる。そして、そこに理念に照らした根源的な問いの重要性がある。

ちなみに、ここでいう規範とは会社法の根幹にある有限責任制の対価としての「資本3原則」（資本制度）である³。新会社法の問題点を鋭く問うた稲葉威雄『会社法の基本を問う』（中央経済社）では、会社法における資本概念の矮小化（背理としての資本金ゼロ）という点に触れているが、それは現実>規範の1つの現れといえる⁴。

効率と公正 「あるべき立法」の基礎に公正の確保がある。だが、今日はむしろ効率性が重視されるようになっている。ここに、公正と効率とのバランスという問題がでてくる。例えば、最近右折信号が増え対向車がまったく来なくても、右折待ちの長い列ができる。むしろ右折事故の抑制（安全性）のためだが、効率性は落ちる。法はこの効率と公正のバランス（調整）が課題となるが、新会社法には効率の方に軸足をおく姿勢がみえる。そこに経済界の意向を受けた法改正のあり方がある⁵。特に、ベンチャー企業法

² 関連して、同書91,109ページも参照。

³ ①資本確定の原則、②資本不変の原則、③資本充実・維持の原則。

⁴ 詳しくは、拙稿「書評：稲葉威雄『会社法の基本を問う』」（『経済学論集』第38巻第4号、2007年3月）参照。

⁵ 稲葉前掲者では、甘味剤（自由、効率）と苦い薬（規律、公正）としてうまく説明されてい

制、種類株式制度などにみられる、特殊（特定ニーズ）を一般化（制度）する危険性という眼識が大切だ。

（ここに『週刊東洋経済』12月23日号での書評が入る）

4 法人税制への批評眼－新会社法と法人税制－

法人税制の現代化 会社法の現代化は法人税制の現代化でもある。これまでに、金融取引税制の抜本改正（平成12年）、組織再編成税制の創設（平成13年）、連結納税制の創設（平成14年）がなされたが、これからの課題は①トライアングル体制の見直し（依存型→自立型、分離主義）、②資本に関する税制の見直し、③事業形態の多様化→事業体税制の抜本見直し、④国際税制の見直し、などが挙げられる⁶。

「資本」への眼 ここで筆者の関心を挙げておくと、①税制における「資本」の意味、資本取引の変容、②金融取引税制と時価会計、③訴訟と理論（訴訟の場での理論分析の力）、④マクロ経済と税法（租税回避問題と訴訟など）である。いずれも、法人税制に対する制度と理論の両面にわたる批評対象だが、特に「資本」が重要に思える。

ちなみに、「資本」といっても1つではない（資本の多様性）。①利益決定と資本（企業会計固有）、②配当規制と資本（会社法固有）、③株主持分と資本（B/S表示：商法と会計）、④所得算定と資本（税法固有）などが挙げられるが、こうした異なる「資本」の概念という視点が重要だ。そして、なかでも法人税固有の「資本」概念が先に挙げた現代化の課題とどうかかわるか、これが1つの課題といえる。

5 何のための学問か－「悪意なき欺瞞」という眼識－

“命がけ”の研究 筆者は税理士の先生方に誘われて、会員ではないものの日本租税理論学会（06年12月2～3日、静岡大）に参加した。弱者・人権・憲法、学問と運動論、目ざす国家の形・像など、そこに“天下国家”にかかわる討論があった。権力とも対峙する“命がけ”の研究といっても過言ではない⁷。そこに、日頃参加している会計学会ではまず見られない態度（警世の学問）をみる思いがした。

学問と「世間」 会計学分野の研究や学会もそうした諸点と無縁でないはずだが、これまでかかわってきた研究や学会のあり方は必ずしもそうでない。先にみた“自己目的”研究に安住する姿勢、“ジャーナル共同体的”な体質が依然として存在する。先の「世間論」の阿部謹也が説いて見せた学問と世間という眼識、アカデミズムの世間性という

る。

⁶ 例えば、朝長英樹「会社法と法人税改革」、中里実「金融取引をめぐる最近の課税問題」（以上、『租税研究』2006年11月号）を挙げておきたい。

⁷ その後、日本租税理論学会編『消費税増税なしでの財政健全化』（法律文化社、2007年）として出版されている。

眼識が重要だ⁸。

「教養」と会計 その阿部謹也は師（上原）の言葉、すなわち「それをやらなければ生きてゆけないようなテーマを探せ」を生涯大切にしたという。それを特にやらなくとも十分生きゆける、これが大半ではないか。まさに“命がけ”の研究の姿勢がそこにある。阿部は「教養」の大切さを説いているが、真の意味での「教養」と会計がどうかかわり得るか、これが大きな課題といえる⁹。

「悪意なき欺瞞」という眼識 ここでガルブレイスの「悪意なき欺瞞」（innocent fraud）という眼識に触れておこう。なぜなら、そこに意図せざる欺瞞性への痛烈な批判の眼があるからだ。悪意がないだけにやっかいだが、それが「発言力に富み、政治的に勝る個人や集団を利する」という点が重要だ¹⁰。

ここに、学問のあり方、そしてその力が試される。阿部やガルブレイスのいう眼識がないと、まさに発言力に富み政治的に勝る個人や集団を利することになるからだ。そこにとりたてて悪意がなくても（それが実は問題なのだが）－。

学者ごっこ、学問ごっこ 何のための学問か、に関しては常日頃思っていることがある。ごく少数の人たちを除いて、「学者ごっこ」、「学問ごっこ」ということである¹¹。大半は意識すらないだろうが、「プリテンド」（よそおい、ふり）ともいえる。それは、とりわけ自然科学分野に比して社会科学分野でいえる。

大学という世間に長く身を置いて、「学者ごっこ」や「学問ごっこ」のある種の欺瞞性（よそおい、ごまかし）を意識するのは私だけだろうか¹²。

6 人の力、教育の力、学問の力

人の力と教育 筆者は沖縄国際大学産業総合研究所主催のセミナーで、「会計時評事始め」と題し話しをした（06年8月4日）。特に、経済の力、政治の力も重要だが、もっと大切なのはそれを担う人の力であることを強調した。そして、その人の力を培うの

⁸ 阿部謹也『「世間」とは何か』（講談社現代新書、1995年）、『「教養」とは何か』（講談社現代新書、1997年）、『学問と世間』（岩波新書、2001年）。ちなみに、阿部は『「世間」とは何か』のあとがきで「…実際私はこれまで何回かこの話（世間の問題－引用者）の要旨を講演したり、報告したりする機会があったが、学者が集まっている集会では理解をうることすら困難であった。思うに学会というところは、強固な世間の牙城なのであろう」と記している。

⁹ 詳しくは、石川純治・齋藤正章『現代の会計』（放送大学教材）のコラム1『「教養」としての会計学』参照。筆者のHP（駒澤大学のHP→教員紹介→経済学部）の「その他」コーナーの「放送大学の番組作成を担当して－その舞台裏－」でも触れている。

¹⁰ ガルブレイス／佐和隆光訳『悪意なき欺瞞』（ダイヤモンド社、2004年）16ページ。

¹¹ その少数の人たちのなかに筆者は入らないことを付言しておこう。

¹² この点で、「ちなみに筆者はこと会計学に関して『学者』などという言葉はおこがましいので、自分が会計学者とはとても言えないし、まして大学院生やOBを『弟子』などとはけっして言えない。さらに言えば、えてして学問性の高くない分野ほど、純然たる学術面（何をやっているか）よりもどの大学の先生であるかにプレステージを求めたがるものだ」（拙著『変わる社会、変わる会計』91ページ）と述べたが、これもここでいう（悪意なき）欺瞞性的一端である。

が、ほかならぬ教育の力であり、また学問の力であることを強調した¹³。

教師のあり方がポイント そこで、会計教育にその力があるか、会計学にその力があるか、と問いたくなる。大学の教師のあり方、これがポイントだ。教育を自己の研究に利用する姿勢すら見られるが、教師が先の“自己目的”研究に安住すると、それはどうして無理というものだ。方向はまったく逆で、研究を教育にどう生かすか、これが肝要だ。

「きっかけ」を与える では、教育・学問の力をどう考えるか。筆者は、結局のところ、教育とは「きっかけ」を与えることだと思っている。「××力」と、なんでもかんでも「力」を付けるご時世だが（それがいいとは思わないが）、あえて言えば「きっかけ力」だ。この視点が大切で、長年の経験からそう思う。

「見えないもの」から捉える とりわけ「見えるもの」を「見えないもの」から捉えるという視点が大切だ。それは、筆者が日ごろから強調していることだが、物事を絶対視しない、つまり相対化の力を培うことにも通じる。したがって、何をもって相対化するかが重要になる。

7 風潮に流されない－自立した人間に－

風潮に流されない 産業総合研究所主催のセミナーに先立つ沖縄国際大学の集中講義（06年7月31日～8月4日）では学部学生相手に話しをしたが、そこでは風潮に流されない自立した人間に、そのために自分を鍛えよ、どう鍛えるかを考えよ、と強調した。そして、そのために大学に来たのではないか、なんのために大学に来たか、よく考えてほしいと述べた。ちなみに、この「風潮に流されない自分に」は駒澤大学の私のゼミのモットーでもある。

孤高の見地 とりわけ、孤立を恐れるな、そして学部学生にはまだ難しいけれども、孤高の見地、特にその「高」の見地の大切さを述べた。さらに、そのための1つに史的俯瞰の大切さがある。俯瞰とは「高いところから見おろすこと、全体を上から見ること」（広辞苑）であるが、史的俯瞰とは歴史軸を通して「今」の存在を俯瞰するということだ。そのことで、「今」という存在を史的に相対化する。ともかくも、集団に帰属する安定（安住）感よりも、孤高の見地は格段に生きるレベルが高いのである。

“見えてくる”感覚を 日頃から“見えてくる”感覚の大切さを強調している。史的俯瞰もそのためだ。この感覚が得られると、“動じない”生き方につながる。何のための学問かは、結局のところ、この“動じない”生き方を支える相対化の力だと思う。

先の“自己目的”研究に安住する態度は、端的に言って、この「生きていく」ということとは切り離された世界だ。そこに“動じない”ための土台はけっして築けない。真の「教養」とは生きていくということと密接にかかわっている。先に「教養としての会計学」を強調したゆえんである。

8 むすびにかえて－「一圓相」と「我逢人」－

¹³ 筆者のHPの「学会・セミナー」コーナー参照。

「一圓相」－“動じない” 生き方 究極的な課題は、この“動じない”という生き方だろう。そして、究極の相対化は「死」の相対である。禅のなかに「一圓相」という言葉があるが、「絶対無」の哲学、「無即有」（西田幾太郎、田邊元）、さらにはヘーゲル哲学の核心にも通じる。

駒澤大学野球部の太田誠前監督の『球心いまだ掴めず』（日刊スポーツ、06年2月）のなかに、この「一圓相」に触れられているところがある。お気に入りの箇所なので、ここに紹介しよう¹⁴。「『一圓相』という言葉をご存じだろうか。古来、禅僧は筆で一丸く円を描く。世の中のものは、すべからく円、すべてが空であることを示しており、禅の悟りを象徴的に表したものと言われる。私は、これを、すべてはゼロから始まってゼロに終わることを表したものだと思っている」（17ページ、傍点は引用者）と。

ゼロになる ちなみに、宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」の主題歌に、次のような一節がある。「ゼロになるからだが耳を澄ませる、生きている不思議、死んでいく不思議、花も風も街もみんな同じ」（「いつも何度でも」より）。大変気に入っている一節だが、からだが「ゼロになる」と、生きていることも死んでいくことも、みんな円のようにつながって同じに見えてくる、ということだろう。だが、この「ゼロになる」というのがきわめて難しいのである。

「我逢人」－出逢いこそ命 前掲書のなかに、もう1つ好きな言葉がある。「我逢人」である。最後に、それを引用して本稿を終えたい。

すなわち、「これは、すべては人と逢うことから始まる。心と心の出逢い、物と物との出逢い、人と物との出逢い、すべて『出逢いこそ命』ということを表しているという。…人と出逢うことを、これほど意識し、そのことを大切にしたら、どのくらい人生が充実するだろうか。私は、この言葉を人生の上でもっとも重く考えて生きてきた」（244ページ）と。

¹⁴ 詳しくは、筆者のHPの「その他」コーナーに掲載の「太田監督勇退に想う－球心いまだ掴めず」参照。